

## 音楽の感情表現的側面を通じた保育内容表現授業におけるメタ経験について

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 島川 香織   |
| 雑誌名 | 教育総合研究叢書 = Studies on education   |
| 号   | 13  |
| ページ | 81-93   |
| 発行年 | 2020-03-31  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000582/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000582/</a> |

# 音楽の感情表現的側面を通じた保育内容表現授業におけるメタ経験について

## Meta-Experiences in the Class of the Childcare Contents Expression Through the Aspect of Emotional Expression of Music

島川 香織\*

Kaori SHIMAKAWA

### 抄 録

本研究の目的は、保育士・幼稚園教諭をみざす学生を対象とした保育内容表現授業における音楽の感情表現的側面を通じた学生のメタ経験について明らかにすることである。検証の結果、音楽劇づくりの活動における感情、判断、取り組みの課題としての手続きが、バランスよく循環して為されていることがわかった。

### I はじめに

乳幼児期に相応しい教育の在り方とは、どのようなものであろうか。無藤隆（以下無藤）は、保育者が、子どもたちが能動的・主体的に物事に関わり成長を遂げていくことを支え促すことに言及したうえで、子どもたちが経験してほしい事柄を整理したものが、保育内容の5領域であるとしている。<sup>1)</sup> また、幼児教育の一番の中心は、子どもが自分の「見方・考え方」を自分のものにしていく過程である「学び」にあり、保育者がそれを援助していくことであるとした。<sup>2)</sup> この幼稚園・保育所・認定こども園のすべてにつながる幼児教育の根幹について、保育内容の5領域のひとつである「表現」において、子どもたちの能動的・主体的な関わりを援助する保育者養成につながる取り組みは、どのようになされているのであろうか。

筆者は、現在、大学での保育士・幼稚園教諭養成課程において「保育内容表現Ⅱ（音楽）」の授業を担当しているが、普段から、授業科目の内容のすべてを、乳幼児向けに実施しているわけではなく、子どもたちの能動的・主体的な関わりを援助する保育者養成にダイレクトにつながる大学の授業を実現できているとは言い切れない。

無藤は、前記した幼児教育における「見方・考え方」は、「幼児がそれぞれ発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心が動かされる体験を重ね遊びが発展し生活が広がる中で環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして諸感覚を働かせながら試行錯誤したり、思いを巡らせたりする」ことであるとしている。<sup>3)</sup> 子どもたちが、思いを巡らせながら、諸感覚を働かせながら試行錯誤する過程は、表現されるものを創造する過程でもある。ここでは、子どもたちの内面

---

\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

で意味をもった内容が、情動を伴った表現として外に表される。それでは、遊びや生活の中で、保育者は、どのようにして、子どもたちの表現する過程を援助することができるのであろうか。

本研究では、先ず、感情表現的側面を通した音楽の意味を探る。次に、乳幼児が表現されるものを創造する過程に、保育者は、どのような教育が可能であり得るのか考察する。次に、それらがどのように大学での「保育内容表現（音楽）」の授業科目で取り入れられたのか検証を試みる。

## II 感情表現的側面としての音楽

本章では、音楽を通した表現の意味を探る。前川陽郁（以下前川）は、ベネット・リーマーが、とりわけ教育の場において、芸術に関して「伝達」の語を使わないことを提案したうえで、芸術家と鑑賞者の間に起こることは「伝達」ではなく「共有」であるとしたことや、音楽をどのように感情が進むかについての知識としたことを示したうえで、音楽が表現の手段ではなく、感情の表現であると考えさせる側面があるとした。<sup>4)</sup> ここで、前川は、音楽が伝達であるならば、音楽が他の人間との関係の中で初めて成立する相互的なものとなりうるが、そうではなくその人の中で閉じた独立的なものであり「伝達者と被伝達者の自己に深く関わるものである」とした岡本重温の説を取り上げ、音楽の非伝達性を強調している。伝達者として表現した者により聴き手に伝わった内容は、あくまでそれを受け取った非伝達者によって咀嚼され感じ取られるものであるので、このように表現された音楽を「伝達」ではなく、表現した者と聴き手で共有されるものとして位置づけることに何ら問題はないであろう。

そのうえで、前川は、音楽の感情表現的側面の働きについて、音楽の形成や伝達と関係づけて以下のように捉えている。<sup>5)</sup> それによれば、音楽活動の中で、感情と関係するものとしての各部分は、音楽の他の部分と関係づけられることで、表現的機能を持つものから形成の機能を持つものに組み替えられていき、その組み替えを可能とするものは、感情の基になっている感じ（疑似感覚）と呼ぶべき速さや高さ等の感覚であり、例えば、それらで対照を作ることで、形成に寄与している。ここでは、音の速さや高さ等から醸し出される感じ（疑似感覚）を通して感情が感じられ、それらを組み替える形成により感じが変化し、感情の内容にも影響があるということになる。

ここで、前川は、全く同じ感情的性格に貫かれた曲があれば、もしくは、部分のみについて、感情に目的として意識が向けられる条件づけがあるような場合には、（音楽が）感情の表現になり得ることができ、感情の伝達にもなり得るが、多くの場合、伝達された、送り手のものとして引き受けられた感情ではなく、第一に受け手（聴き手）の側にある感情とみなすべきであるとしている。ここでは、聴き手は、表現者の感情をダイレクトに受け止める場面（部分）も起こりうるが、多くの場合、音楽を通して、聴き手が、聴き手自身の内面を通して、聴き手の感情として表現された音楽に対して感情を生起させるということになる。

ここまで示したように、前川によれば、音楽が感情表現的である基になっているのは感じ（疑似感覚）であり、個々人自身の感情と密着して音楽の形成が進められ、形成の機能も担っている。す

なわち、感情表現的に形成が行われることは、演奏者や聴き手において、音楽活動の非伝達性を確かなものにし、個々人の感情と密着して形成が進められ、形成性その人自身の活動に即しているのである。ここでは、演奏者が、音楽を感情表現的に、感じ（疑似感覚）を通して形成するとき、聴き手も聴き手自身の感情を基に形成された音楽を聴くこととなり、その観点では、音楽は「共有」を通した個々人の内面に深く関わるものとなるのである。

### III 乳幼児の表現における保育者の在り方

前章では、音楽の感情的側面を通した表現の意味を探ってみた。

本章では、乳幼児の表現における保育者の在り方を、感情と創造性の側面から考察する。

カルラ・リナルディ（以下リナルディ）は、「レッジョ」の乳幼児保育園と幼児学校での経験をまとめた『レッジョ・エミリアと対話しながら—知の紡ぎ手たちの町と学校—』の中で、（大人は）男女を問わず、感情を表現することがともすると不慣れであるとしたうえで、行動を決定するのは、かなりの部分が感情からであり、その感情には、それなりの理由があり、論理があるとした。<sup>6)</sup>

ここで、リナルディは、大人は、愛、情熱、恐怖、不安、悲哀、歎び、幻滅と落胆等、どの感情に対しても身を引きがちであるのに対して、子どもたちは、そうした感情を恐れず、（大人が）彼らの心の声に耳を澄まし、退けることなく聴き入るならば、子どもたちは語りはじめ、耳を傾けてもらうために、語りはじめるとしている。感情は、（子どもたちが）行う世界の探求を助け、理解を助け、関係をつくり出すとした。ここで、リナルディは、いろいろな感情（怒り、愛、恐怖、信頼、悲哀、苦悩）は、それらを語る事ができれば、決して恐れるに足るものではなく、大人が、子どもたちとの対話の中で、話をよく聴き、感情を共有することの大切さに言及している。リナルディによる、子どもたちが、感情を発達させ、新しい批判的な仕方での省察能力や、いったん身につけた諸価値を留保できる心の広さなど、感情が、感情そのものに対して責任を担い、感情を率直に認め、それについて述べる勇気を持てるようにするために<sup>7)</sup>、保育者が、彼らの話に耳を傾ける必要があるであろう。

次に、I章で提起した「子どもたちが、思いを巡らせながら、諸感覚を働かせながら試行錯誤する過程」としての、子どもたちが表現されるものを創造する過程について考察する。

リナルディは、子どもたちの不断の意味探求に同伴することは、解答を求めて子どもたちが作り出す意味や説明が、現実と現実への子どもたち自身の関係性について、子どもたちがどのように感じ、問い質し、解釈しようとしているかを教えてくれる重要な手がかりであるとしている。<sup>7)</sup>そして、この子どもたちの志向性としての問いを生み出し、その解答を追求しようとする意志が創造性を特徴づけるものであるとしている。すなわち、この問いかけの中に、生きることの意味がぎっしりと詰まっており、生きることの意味の探求があるとしている。

それでは、このように創造性が、子どもたちと対象となる現実との関係性の中から、子どもたちが意味を探求することにあるのであれば、保育者は、それに対して、どのような在り方で臨むこと

ができるのであろうか。

リナルディは、「関係性と傾聴のペダゴジー」として、子どもたちが、他者との関係性の中で、創造を追求できるよう寄り添い、傾聴することにあるとしている。<sup>8)</sup> リナルディは、傾聴を一つの態度として捉え、闊達さの、耳を傾け、傾けられているという感覚の、すべての感覚をとぎすましてそうしているということの、メタファーであり、他者の言葉を聴き、傾聴の行為の背後には、欲求や感情があり、価値や観点の違いを受け入れようとする態度があるとした。

そして、この耳を傾けるという行為は、他者との観点の相違を大事にすることであり、傾聴の行為の背後には、聴く側と聴かれる側、その双方の創造性と解釈行為が働いており、耳を傾けることで、他者に対して敬意を払い、他者に対して自分を開くということであり、聴く耳をもつことが、あらゆる学習の前提であるとした。

ここで、リナルディは、子どもたちが、傾聴という点で、非凡ともいえる能力を発揮して、寛大に、注意深く、他者たちの声に耳を傾けるとしている。聴く行為が、コミュニケーションの土台であり、子どもたちはコミュニケーションし、他者と関わることに本能的に身を乗り出す生物として存在するとした。

リナルディは、学習自体を反省的に振り返り、行動にフィードバックしていくことで、学習がより高い水準に押し上げられ、学習した内容をメッセージとして表現することで、学びが、身についた知識となり、能力へとつながるとした。そして、自分たちの学習の過程を表現に持ち込んで、それを他者とシェアすることは、認識の源である反省的思考にとって、欠かすことのできない条件であり、このイメージや着想の力が主体に認知されると、表現行為として具象化され、図像的あるいは、シンボリックな視覚表現となり、発展し、学習から創造性が発生するとした。視覚的題材でなくとも、人間の表現を通じた創造性の発露と認識すれば、媒体が音である音楽表現においても、同じ過程が可能であると考えられる。

このように、子どもたちとのコミュニケーションを通して保育者が傾聴するという行為は、子どもたちが学習を反省的に振り返って他者と分かち合い表現し、学習した内容が、子どもたちによって主体的に認知され表現行為として具象化されることが、子どもたちの創造性につながっているということが云えるのである。つまり、保育者は、子どもたちとのコミュニケーションにおける傾聴を通して、子どもたちの感情の教育と子どもたちを創造性に導く可能性があるといえるであろう。

#### IV メタ経験とは

II章では、感情表現的な「感じ（疑似感覚）」からの形成を通して、音楽が「共有」を通じた個々人の内面に深く関わることを示された。III章では、イメージや着想の力が主体的に認知され、表現行為が具象化されることが創造性に結びつくことが示された。また、保育者の子どもたちとのコミュニケーションにおける傾聴の必要性が示された。それでは、音楽の感情表現的側面について、将来、教育者（保育士・幼稚園教諭）を目指す養成課程の大学での授業では、どのような授業展開が考え得る

のであろうか。

本章では、そのための手法として、社会的スキルと感情的スキルに対するメタ経験 (Meta-Experiences) について考察を試みる。

神経科学の最新の研究では、感情と認知が脳内では密接に結びついており、(学習) 経験の要素は、認知的あるいは感情的ラベルが付けられるが、この感情と認知は脳内で統合され、切り離せないもので、両者の区別は理論上のみのものであることがわかっている。<sup>9)</sup> ここで、(人間の) 脳は、他者との共感に向かい、他者の経験に密接に結びつけられており、人々は脳を用いて、社会的相互作用と文化的文脈を通して学習するとされている。<sup>10)</sup> また、認知と感情は、脳内で統合され、この2つのシステム (社会的感情的システムと認知システム) は重要な点で相互に作用している。<sup>11)</sup>

このように、経験によって脳内で変化を引き起こされることが発見される前から、心理学者や教育者は、メタ認知と同様に人間の行動をモニタリングしたり、制御したり、調整したりするものとして「メタ感情 (meta-emotions)」「メタ経験 (meta-experiences)」を提唱している。<sup>12)</sup> ゴットマンは、感情に対する感情を「メタ感情」とし、「自分と他者の感情に関する、組織化され、構造化された一連の感情と認知の集まり」と定義している。<sup>13)</sup> 一方、エフケリデスは、学習中の「メタ経験」に目を向けた。エフケリデスによると「メタ経験」とは、人が課題に遭遇し、それに関する情報を処理した時に、人間が気付いたり、感じたりするもののことである。<sup>14)</sup> エフケリデスは、「メタ経験」を「感情」「判断あるいは評価」「取り組みの課題に特化した知識」の3種類に分類した。それによれば、「感情」とは、成功の感情、失敗の感情、慣れの感情、難しさの感情、自信の感情、満足の感情、既知感をもさし、個人的なものや特定の課題に関連したものである。「判断あるいは評価」は、学習判断、記憶の情報源、課題の作業量の見積もりと時間の見積もりを指す。「取り組み中の課題に特化した知識」は、課題の特徴と採用される手続きを指す。

前述したように、音楽を通じた表現は、感情表現的な「感じ (疑似感覚)」を通して形成される。そして、子どもたちは、この感情を伴いながら、他者との関係を通して、創造性を発揮していく。

社会的スキルと感情的スキルに対するメタ認知教授法は、幼稚園児、初等学校及び中等学校の児童生徒、及び大人の社会的感情的能力を育てるのに用いることができるとされている。<sup>15)</sup> 筆者は、これらの感情を伴い、他者とコミュニケーションを取りながら表現を分かち合い、その過程を通して創造性を発揮していく活動について、気づいたり感じたりしたことを「メタ経験」として振り返ることが、子どもたちと同様に、将来子どもたちの教育を担うであろう大学での養成課程の学生にも、必要であるのではないかと考える。

それでは、このエフケリデスの「感情」を伴う「メタ経験」は、どのように、大学での保育士・幼稚園教諭の養成課程での「保育内容表現 (音楽)」の授業で為されたのであろうか。「メタ経験」の3つの要素である「感情」「判断」「取り組みの課題 (手続き)」の観点で、次章から具体的な検証を行う。

## V 実践概要

本章では、音楽劇づくりの活動の実践概要を示す。

### 1. 実践概要

実践概要は以下の表1の通りである。

(表1)実践概要

|       |  |
|-------|--|
| L1    | こども人形劇のお話の内容を理解し、グループでの役割を決める。               |
| L2~L4 | お話にふさわしい音楽劇を検討し、歌唱、身体表現、鍵盤楽器、打楽器を使って表現を工夫する。 |
| L5    | グループごとに作成した音楽劇を発表する。                         |

※数字は授業回数を示す

### 2. 実践方法

#### (1) 実践方法

授業実践は、R.元年5月から6月にかけて、関西国際大学教育学部教育福祉学科・基幹科目「保育内容表現Ⅱ」3クラスの学生を対象とし、打楽器(大太鼓・小太鼓・鉄琴・木琴・小物楽器)、グランドピアノ1台、電子ピアノをひとり1台ずつ使用した。「保育内容表現Ⅱ」の授業は、「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」などの科目を履修し、鍵盤楽器演奏を経験した学生で、保育士・幼稚園教諭を目指す学生のための音楽を通じた内容表現の授業である。

今回の授業では、こども人形劇場のDVD『三匹のやぎのガラガラドン』<sup>16)</sup>を視聴し、次に『ぞうくんのさんぽ』<sup>17)</sup>を教師が朗読したうえで、1グループ7~8人のグループ編成を行い、自分たちのグループがどちらのお話に音楽劇を創作するか話し合った。

音楽劇づくりの活動に入る前に、教師が以下のグループシート(資料1)を各グループに配布した。

#### (資料1)の内容

☆音楽(劇)づくりは、公共の場で発表するのではなく、あくまで演習としての発表ですので、

ひとりが複数の役を担当します。

☆教育現場での音楽劇の発表での先生役とこども役の両方をします。

☆スケジュール(実際には具体的な日付を確認)

第1回目 ナレーション、セリフ、ピアノ、歌、リトミック、音表現の台本づくり

第2回目 音楽表現(ピアノ・歌・リトミック)+音表現の音楽づくり

第3回目 音楽表現(ピアノ・歌・リトミック)+音表現の練習

第4回目 リハーサル&練習

第5回目 発表(10分以内)





## (2) 授業方法

授業方法は、こども人形劇場のお話の内容を理解したうえで、お話にふさわしい音楽劇を創作するにあたり、まず、あらすじを台本に写し、語り手・登場人物・音楽表現(歌・リトミック・ピアノ)の役割を決定した。次に、音楽表現や音表現をあらすじのどこに挿入するかを決定し、その過程で、音楽表現に使用する作品選択とその替え歌の歌詞づくりや、音表現に使用する楽器の選択と楽器担当を決定し、その都度台本に略記(資料3)を用いた形で記述した。

音楽表現(ピアノ・歌・リトミック)と音表現による音楽づくりのやり方を記述した台本作成が終了したグループから、音楽表現と音表現の練習→リハーサル練習へと進行し、最終的にすべてのグループが音楽劇を発表した。それぞれの授業回では、グループ活動における個人の活動と振り返りの記録としてワークシートを提出した。

すべての音楽劇の活動を終わってから、学生ひとりひとりが音楽劇づくりの活動全体に対する振り返り個人ワークシートに記述した。

## VI 保育内容表現授業におけるメタ経験

ここでは、記述が端的であった学生Aの記述した活動全体に対する振り返り個人ワークシートの記述を取り上げ、①感情、②判断、③取り組みの課題(手続き)、の3つの視点から分析を試みる。学生Aは『三匹のやぎのガラガラドン』を選択したグループに所属している。

以下、1. から 8. は、ワークシートの質問項目である。

### 1. 音楽表現をなぜそこに挿入しましたか？

(1回目) ②③話の始まり(さんぽ)今から始まる！と子どもたちをひきしめ最初歌うことで緊張をほぐす。

(2回目) ②③トロルの登場シーン(大だいこ)トロルが出ることで場面が暗いイメージになったことを意味づける。

(3回目) ①②③話の終わり(believe)ハッピーエンドで終われるようにトロルもリトミックと一緒に歌う。

### (分析)

音楽表現をなぜそこに挿入したかについて、学生Aは、1回目の音楽表現の挿入では、今から始まる！と取り組みの課題(手続き)として最初に歌うことが、子どもたちをひきしめ緊張をほぐす演出効果があると判断された。2回目は、トロルの登場を取り組みの課題(手続き)として、大だいこの音を使用することで、暗いイメージが表現できたと判断された。3回目は、話の終わりをハッピーという感情でエンディングすることが判断され、取り組みの課題(手続き)がトロルも一緒に歌う演出となった。

2. 音楽表現を挿入してみて、ストーリーの中でどのようなことに気づいたり、感じたりしましたか？

(1回目) ①②明るい楽しく草を食べる様子をイメージすることや、楽しく最初から行うことができた。

(2回目) ①②③トロルの怖さや恐ろしさを音で表し、ガラガラドンの心情も同時に表した。

(3回目) ①②③お話はハッピーエンドで終わることが理想で自分の班らしい終わり方ができた。

(分析)

音楽表現を挿入してみて、ストーリーの中でどのようなことに気づいたり感じたかについて、1回目の音楽表現の挿入では、明るく楽しい感情で草を食べるイメージをしたことが、楽しい感情で最初から行うことにつながったと判断された。2回目は、トロルの怖い恐ろしいキャラクターを音で表現するという取り組みの課題(手続き)が為され、立ち会うガラガラドンの心情としての感情も同時に表現するという取り組みの課題(手続き)が為された。ここでは、トロルのキャラクターと、対するガラガラドンの心情を同時に表現するという判断が為された。3回目は、トロルも含めハッピーエンドで終わることが理想とした判断をすることで、自分たちらしい終わり方という誇りをもった感情を伴う終わり方という取り組みの課題(手続き)が為された。

3. 音楽表現の替え歌は、どのように選択しましたか？

②③ストーリーに合った曲を複数選択し、そこから替え歌の作りやすさや振り付けを考えた上で、聞いている人によりイメージが伝わる歌を選びました。実践では、子どもたちに選曲させると思いが強まると考える。

(分析)

音楽表現の替え歌はどのように選択したかについて、替え歌の作りやすさや振り付けといった、自分たちの創作がしやすい取り組みの課題(手続き)を想定したうえで、イメージがより伝わる歌を選択するのがよいという判断がなされ、ストーリーに合った曲を複数選択するという取り組みの課題(手続き)が為された。

4. 音楽表現で身体表現(リトミック)はどのように創作しましたか？

①②③今回楽しく自分たちに合った表現をすることを目指していて、どうしたら自分たちが楽しく表現をしているか、自分たちのイメージを聞いている人にも共有できるのかを考え、体を動かしたりみんなで全員で歌ったりしました。

(分析)

音楽表現で身体表現(リトミック)はどのように創作したかについて、感情としての楽しく自分たちに合った表現が目標でありと判断されたうえで、どのようにしたら自分たちが楽しく表現をしている

といえるのかを判断し、また観客とのイメージの共有ができるのかを判断しながら、歌や身体表現の取り組みの課題（手続き）がなされた。

5. 身体表現(リトミック)の動きは、実際に動いてみて、音楽の構成や流れ・曲想とどのように関わっていましたか？

①②③リトミックが、一つ一つのセリフをよりイメージしやすいものにしていました。流れの構成や雰囲気物語り、文章の区切り目となる役目をはたしていました。リトミックごとに気持ちを入れ替えるので、曲調に合わせてセリフも言えました。

(分析)

身体表現(リトミック)の動きは、実際に動いてみて音楽の構成や流れ・曲想とどのように関わっていたかについて、取り組みの課題（手続き）としてのリトミックを入れることで、セリフのイメージをより強く印象づけることができ、また、物語の情景や場面転換、ナレーションやセリフの区切り目となると判断された。感情を、リトミックごとに切り替えることになり、取り組みの課題（手続き）としての曲調を通したセリフの表現につながったと判断された。

6. 音表現はどのように挿入する所を選びましたか？

②③セリフを破らないようにし、セリフの情景を音表現で表しました。特にトロールの登場シーンやガラガラドンの登場シーンは大きさや気持ちを表す音表現を意識しました。

(分析)

音表現はどのように挿入する所を選んだかについて、セリフを邪魔することなく、音表現を行うことが判断された。音表現を通して、取り組みの課題（手続き）としての登場人物のキャラクターや気持ちが意識された。

7. 音表現の楽器や音色は、実際に演奏してみてどのように感じましたか？

②③力の強さや出し方でイメージ通りに音がいかず、手首で振るように出すことやセリフとのタイミングがとても難しく、リトミックに指揮してもらおう形でやってもよいと感じた。

(分析)

音表現の楽器や音色は、実際に演奏してみてどのように感じたかについて、取り組みの課題（手続き）としての楽器の操作が、イメージ通りにいかないと判断され、手首で振るなど、操作の仕方やセリフを言うタイミングなどの表現が難しいと判断されたうえで、リトミック自体が指揮するようなスタイルの工夫がよいと判断された。

8. 音表現や音楽表現は、言葉やストーリーとどのように関連していましたか？

②③人物の心情や状況など、セリフだけでは伝えられないことを音の大きさ、音色で表現し、ストーリーのイメージを形成しました。終始、ハッピーで終わるストーリーを特に音表現で意識しました。さらに、替え歌にすることで、セリフ+音で聞いている人に伝えることができる。「作品をどう相手に伝えるか」

(分析)

音表現や音楽表現は、言葉やストーリーとどのように関連していたかについて、セリフだけでは伝えられないと判断された人物の心情や場面の状況などを、取り組みの課題(手続き)としての音の大小や音色で表現することが、パフォーマンスにおけるイメージの形成につながると判断された。結末の解釈としてのハッピーエンドを、音表現で行うことが判断された。セリフと音の表現を通して、替え歌をつくるという取り組みの課題(手続き)が、人に作品内容をどのように伝えるかにつながっていると判断された。

## VII 分析結果

学生Aの記述した音楽劇づくりの活動全体におけるメタ経験としての感情、判断、取り組みの課題(手続き)の3つの視点からの表現的側面は以下の通りであった。

取り組みの課題(手続き)から判断に結びついた表現的側面は、歌うことでの演出効果や、楽器の使用によるイメージ表現、リトミックがセリフのイメージの印象づけや、物語の情景や場面転換や区切り目となることが判断された。また、楽器の操作がイメージ通りにいかないことは、表現手法の難しさによると判断され、そのことから、リトミック主導の表現の工夫がよいと判断された。替え歌の創作という取り組みの課題(手続き)が、人に作品内容をどのように伝えるかという表現的側面につながっていると判断された。

感情と判断から取り組みの課題(手続き)に結びついた表現的側面は、ハッピーな感情のエンディングが演出構成につながった。

感情から判断に結びついた表現的側面は、明るく楽しい感情で草を食べるイメージが、楽しい感情で創作することにつながったと判断された。

判断と感情が同時進行的に為された表現的側面は、キャラクターの音での表現と、対するキャラクターの感情を同時に表現することが、ハッピーエンドの理想の表現になると判断された。そのことが、創作者の誇りという感情を伴う終わり方につながる取り組みの課題(手続き)として再び判断された。

取り組みの課題(手続き)から判断に結びつき、そこから再び取り組みの課題(手続き)に結びついた表現的側面は、創作のしやすい取り組みの課題(手続き)の想定は、イメージが伝わる歌の選択によると判断がなされ、ストーリーに合う曲の複数選択という取り組みの課題(手続き)に結びついた。

感情が判断されて取り組みの課題（手続き）に結びついた表現的側面は、感情としての楽しい自分たちに合った表現が目標であると判断されたうえで、実際の自分たちの楽しい表現が判断され、観客とのイメージの共有が判断されながら、歌や身体表現の取り組みの課題（手続き）に結びついた。

判断としてセリフを邪魔しない音表現、結末の解釈としてのハッピーエンドを音表現で行うことが判断された。取り組みの課題（手続き）としてキャラクターの気持ちの意識が為された。

判断から取り組みの課題（手続き）と判断に結びついた表現的側面は、セリフだけで伝えられないと判断された人物の心情や場面状況は、取り組みの課題（手続き）としての音の大小や音色の表現に結びつき、そこから、パフォーマンスにおけるイメージの形成につながると判断された。

## VIII 考察と今後の課題

今回の検証を通して、音楽劇づくりの活動における表現的側面は、取り組みの課題（手続き）からの判断、感情と判断からの取り組みの課題（手続き）、同時進行的な判断と感情からの判断、取り組みの課題（手続き）からの判断から再び取り組みの課題（手続き）への結びつき、感情を起点とする複数の判断からの取り組みの課題（手続き）、判断からの取り組みの課題（手続き）と判断への結びつきなど、メタ経験の3つの要素の循環がバランスよく循環しており、単独でのメタ経験の要素による表現的側面は、むしろ少なかった。このことから、創作活動において、感情と判断と取り組みの課題の手続きとしての学習の教育現場への適用が考慮されてよいのではないかと考えられる。今後の課題として、本来の目的である乳幼児にこのような創作活動を実施する際、保育者はどのように、乳幼児の活動を見守り、傾聴していけるのかについて検証する必要がある。

## 引用文献

- 1) 『新訂 事例で学ぶ保育内容 領域 表現』(2019)無藤隆監修 浜口順子編者代表(株)萌文書林 p.4
- 2) 同書 p.13
- 3) 同書 p.12
- 4) 『音楽と美的体験』(2004)前川陽郁(株)勁草書房 pp.67-pp.69
- 5) 同書 pp.69-pp.74
- 6) 『レヅジョ・エミリアと対話しながら—知の紡ぎ手たちの町と学校—』(2019)カルラ・リナルデ  
イ 里見実訳(株)ミネルヴァ書房 pp.148-pp.150
- 7) 同書 pp.172-pp.174
- 8) 同書 pp.174-pp.183
- 9) Hinton,C. and K.W.Fischer (2010), ‘Learning from the development and biological perspective’, in N.Dumont, D.Istance, and F.Benavides (eds.), The Nature of Learning: Using Research to Inspire Practice, OECD Publishing, Paris, p.119,

- <http://dx.doi.org/10.1787/9789264086487-7-en> (クリスティーナ・ヒントン, カート・W. フ  
イッシャー「発達と生物学的視点からみた学習」『学習の本質：研究の活用から実践へ』OE  
CD教育研究革新センター編著、立田慶裕監訳、佐藤智子 [ほか] 訳、明石書店、2013年)
- 10) 同書 pp.126-129
  - 11) Passoa,L.(2008), “‘On the relationship between emotion and cognition’”, Nature Reviews:  
Neuroscience, Vol.9 (2), pp.148-158
  - 12) 『メタ認知の教育学 生きる力を育む創造的数学力』(2016)OECD教育研究革新センター編  
著 篠原真子 篠原康正 襲岩晶訳 (株)明石書店 p.169
  - 13) Gottman,J.M., LF.Katz and C.Hooven(1997), Meta-Emotion : How Families Communicate  
Emotionally, Laerence Erlbaum, Mahwah, NJ. pp.6-7
  - 14) Efkelides,A., (2006), “‘Metacognition and affect: What can metacognitive experiences tell  
us about the learning process?’”, Educational Research Review , Vol.1(1), pp.3-14  
Efkelides,A., (2011), “‘Interactions of metacognition with motivation and affect in  
selfregulated learning. The MASRL model’”, Educational Psychology, Vol.46 (1), pp.6-25
  - 15) 『メタ認知の教育学 生きる力を育む創造的数学力』(2016)OECD教育研究革新センター編  
著 篠原真子 篠原康正 襲岩晶訳 (株)明石書店 p.167
  - 16) NHK エンタープライズ発行 DVD こどもにんぎょう劇場4 世界編より
  - 17) 『ぞうくんのさんぽ』(2017) なかのひろたか さく・え なかのまさたか レタリング  
(株)福音館書店
  - 18) 福娘童話集 きょうの世界昔話 12月15日より  
<http://hukumusume.com/douwa/pc/world/12/15.htm>
  - 19) 『こどものうた200』(2013) 小林美実 (株)チャイルド本社, 『子どもがときめく名曲&人  
気曲でリトミック』(2014) 井上明美 (株)自由現代社

## Abstract

This study is a practice report about the meta-experiences in the class of the childcare contents expression through the aspect of emotional expression of music for students to be a childcare person, kindergarten teacher.

As the result, emotion, judgement, the procedure as the task of the approach circulated in a good balance through the activity of the making of music drama.